

令和 2 年 度 自 己 評 価 表

鳥取県立境高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	価値観が多様化する時代を生き抜く力と豊かな人間性を育成する。 ・多様な生徒に応じた教育課程・クラス編成等により、学力の向上と進路目標を実現する。 ・切磋琢磨し、自己の多様な能力・適性を発見して才能の開花を図る。 ・地域に信頼され、地域の期待に応え、地域を支える学校づくりをすすめる。	今年度の 重点目標	「BIG」に育て境高生 1 部活動の振興を基軸としたチーム境高意識の高揚 2 命の教育（人間教育）を充実 3 主体的に学ぶ姿勢を確立して進路目標を実現 4 学校業務改善の取組を進め、学習指導をはじめとする生徒に対する指導の充実を図る

年 度 当 初					中 間 評 価（ 9 月 ）		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 部活動の振興を基軸としたチーム境高意識の高揚	○「部活動に入ってからしっかり頑張った」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○全国大会出場者が80名、入賞者が5名を超えること。 ○中国大会出場者が200名を超えること。	○12月生徒アンケート結果「部活動に入ってからしっかり頑張った」で「あてはまる」と回答する生徒が72.0%（「だいたいあてはまる」を合わせると87.7%） ○全国大会出場者47名（うち入賞者1名）。中国大会出場者数255名（近畿大会含む）。（※以下、下線部の%数字は12月アンケート結果による）	○文武両道の活力があり地域の誇りとなる普通科高校として存在 ○県トップレベルの実績を持つ部活動を維持育成し、学校内外に活力ある境高を発信	○鳥取県運動部活動の在り方に関する方針に基づき、部活動の再編並びに顧問の適切な配置を行い、より一層保護者との連携・協力を密にする。 ○部活動と学習を両立させ、全国レベルで活躍している高校に教員を派遣し、本校の特色づくりを再構築する。	・新型コロナウイルスの関係で活動が制限される中、生徒は出来ることを限りある時間で良く取り組んでいる。 ・春の大会や遠征等がなくなり、工夫をしながら部活動をしている。 ・試験前の部活停止をおおむね遂行できたが、成績との関係性を考察する必要がある。 ・8割を超える生徒が部活動に加入して熱心に活動している。	B	・継続して声かけ、指導を行う。
	○ボランティア活動や地域の活動に参加する生徒の数が増加すること。	○ボランティア参加者は125名（12月末）で昨年度138名（3月末）でやや減少した。 ○スクールプロジェクトは1回雨天中止があったが、その他の回は予定通り実施できた。	○地域のボランティア活動への積極的な参加 ○部活動において地域の人材の力を借りたり、生徒が小中学生に学習やスポーツを指導したりすることで地域の信頼	○ボランティア活動の大切さについての情報を1年次生から生徒に伝える工夫を行う。 ○スクールプロジェクトを例年通り計画的に開催する。	・コロナウイユスの影響で、9月までのボランティアの参加者は14名で昨年より大幅に減少した。		
2 命の教育（人間教育）を充実	○「自分や他人を大切にすることができた」と回答する生徒の割合が9割を超えること。 ○「生徒は自分や他人を大切にすることができるようになった」と回答する教員の割合が9割を超えること。	○生徒アンケート「自分や他人を大切にできる」は97.0%であった。命の教育講演会などをとおして命を大切にする教育を推進した成果が表れた。教員アンケートでも「生徒は自分や他人を大切にできるようになった」は88.0%であった。 ○生徒アンケート「挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」は96.8%。	○生徒一人ひとりの状況を全教職員が把握できているという人権尊重意識の高い職場 ○命の教育全体計画に基づいた規範意識・人権意識の高揚	○継続して生徒の細かな変化に注意を向けるとともに、「待ち」ではなく「攻め」の姿勢で生徒の変化に対して組織的に対応する。 ○規範意識と人権意識を身につけさせるとともに、「いのちの教育講演会」を開催する。	・学校祭の準備・練習などで協力し助け合って活動する姿が見られた。 ・本校の教員は生徒と対話を持つとうとする気持ちが日ごろからある。また家庭訪問や、保健部・生徒部と連携し、生徒の状況把握及び改善にも努めている。 ・生徒情報交換会を実施し、情報共有に努めた。また、支援を要する生徒への支援会議を行い教科担任と共通理解を深めた。	B	・継続して生徒との対話を通じて、実態の把握に努め、問題が起こったときの対応に活かす。 ・コロナ禍をふまえ生徒の心のケアを重点におき、今まで以上に声かけを積極的に行い、生徒の変化に気づけるようにする。 ・引き続き、学年・保健部・生徒部等が連携し、教員間の情報共有に努める。 ・授業時にも気持ちの良い挨拶ができるように指導していく。 ・ゴミの分別、軽量化を進めたい。
	○「挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○ゴミの分別・減量化について、平成28年度との比較で継続して減量を実現すること。	○ゴミ減量化は平成28年度比で9.9%減（4～11月期比較）であり、取組の成果が表れた。教育環境として朝清掃の徹底、生徒会や環境委員等が積極的に周辺清掃やゴミ減量化に取り組めた。 ○学期1回ごとの生徒情報交換会を実施し、教員間の情報共有を深めた。	○挨拶の励行、服装・清掃指導等の徹底 ○生徒が主体となって取り組む学校環境の整備	○生徒会による挨拶運動等、生徒の主体的で活発な活動を促す。 ○環境委員を通じて、ゴミの分別の徹底・減量化などの活動を継続して実施する。	・挨拶や、頭髮・服装に関しては、ほとんどの生徒が概ね守れている。 ・廊下での挨拶は良いが、授業時となると、挨拶ができなくなる生徒がいる。 ・ゴミ分別が徹底されず、収集場所で分別することがある。		
3 学ぶ姿勢を確立して目指す進路を実現	○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」と回答する生徒の割合が5割を超えること。 ○大学入学共通テストの出願率が7割を上回ること。 ○国公立大学現役進学者数が30名を超えること。	○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」と回答する生徒が77.2%であった。 ○大学入試センター試験の出願率が7割を上回り75.1%であった。 ○国公立大学現役決定者数が18名。	○生徒が3年間をとおして進路目標を持ち、その実現に向けて努力する姿の確立 ○キャリア教育全体計画に基づいた明確な進路目標を設定 ○「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を養うため、境考学を充実・発展	○土曜日学習会や講習を継続実施し、学習会の中で生徒一人ひとりが自ら計画した内容に主体的に取り組むことができるよう改善を図る。 ○面接やプレゼンテーション（考えをまとめ他者に伝える力）等の受験に対応できる学習方法を1年次生から指導していく。 ○境考学を充実させるため、探究活動の目的・意義を教職員・生徒に周知し、ともに協働して学ぶ。	・クラッシーのポートフォリオを用いて、考査の振り返りを行うことができている。 ・進路目標が明確でなく、家庭学習も定着していない生徒が多い。 ・8限講習や放課後に図書館を利用して勉強する姿が見られる。 ・土曜学習会や講習など積極的におこなえた。	B	・大学入学共通テスト受験予定者は144名（75%）である。 ・境考学に関して、今年度はコロナ禍によって様々なことが中止・延期となっている。境考学をいかに立て直すか、抜本的な改革を含めて協議する必要がある。 ・境考学への取り組みを全職員で推進していく必要がある。 ・1年生の頃から少しずつ積み重ねていけるような意識付けや、3年間を通しての組織的な取組が必要である。 ・授業を中心とした学習指導を継続していく。
	○「授業の内容に興味がわき、理解が深まった」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○タブレット端末等のICTを活用した生徒主体の授業を8割以上の教員が実践すること。	○「授業の内容に興味がわき、理解が深まった」と回答する生徒は86.4%であり、当初の目標値を超えた。 ○「タブレット端末等のICTを活用した生徒主体の授業」は20.0%の教員しか実践できておらず、今後の大きな課題である。	○アクティブラーニング型授業を取り込んだ授業研究会並びに授業参観週間での各教科代表による公開授業の定着	○アクティブラーニング型授業は、教員側のより一層の研鑽をとおして、自発的に生徒が学べるような環境作り（境高式アクティブラーニング）を構築する。 ○生徒が自ら調べ考察し発表する力をつけるために「境考学」を実施する。	・タブレット端末が教室で簡単に繋がらず、持ち運びなどの負担もある。 ・配信授業を教員全員で積極的におこなえたが、知識・技術・サポート体制などがまだ不十分で一部の教員の負担増につながっている。 ・授業を通して、主体的な学びにつながるよう、生徒の興味関心を高める工夫（映像教材の使用や発問の工夫、話し合いの導入など）を行っている。しかし、一部の生徒にしか効果が表れていない。 ・実験や授業等で生徒に考えさせる授業内容を精選した。		
4 学校業務改善の取組	○行事や委員会等を抜本的に見直す。 ○長時間勤務者の解消	○月当たり(12月期比較) 時間外業務では平成29年度比で34.3%削減となって目標値を超えた。 ○時間外業務80時間以上勤務者は10名。令和元年度の月別変化では、減少傾向にあるといえるものの、県立高校としては本校は常に上位にあり、改善が求められる。	○時間外業務の上限が、月45時間、年360時間を超えないよう遵守 ○休養日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底	○行事の準備等に過剰なものがないかの点検 ○管理職員による各部の休養日、活動時間の把握、遵守の働きかけ ○顧問体制の柔軟な運用	・コロナ禍による配信授業の準備等ため、業務は増加した。業務量は増えている。 ・一部の教科や教員に業務が偏っている。 ・業務量が多く、中々教材研究が出来ない現状がある。 ・長時間労働の解消に至っているとはいえない。 ・コロナウイユスで活動時間の制限もあるが時間外勤務は概ね守られている。	C	・週明けテストや8限の必要性等、抜本的な改革が必要だと思われる。 ・部活動の数の見直しが必要。 ・業務アシスタントは来年度以降も継続してほしい。 ・見回り・監督・居残り指導等で調整し、教科による業務の偏りを無くす。 ・生徒と向き合う時間を重視し、それ以外の業務は極力短縮または削減する。

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し

【100%】

【80%程度】

【60%程度】

【40%程度】

【30%以下】